

研究ノート

## 関ヶ原の戦いにおける諸将の軍役人数(兵力数)についての予察的考察

白 峰 旬

### はじめに

関ヶ原の戦いにおける諸将の軍役人数(兵力数)について、日本戦史編纂委員撰『日本戦史関原役』(版権所有・参考本部)<sup>(1)</sup>では、「附記 第三章 兵数」<sup>(2)</sup>において以下のように記されている。

a 東西両軍兵員ノ実額得テ知ル可ラス b 然トモ是年四月廿七日島津惟新ヨリ同龍伯ニ遣リタル書 附録文書  
第十九號 ニ家康ノ奥州会津ニ向フヘキ兵賦ハ禄一百石毎ニ三人ナリト云フコトアリ c 乃チ試ニ之ヲ法數ト  
シテ東軍諸將ノ兵ヲ算スレハ左ノ如シ

下線aでは、「東西両軍兵員」の「実額」(=「実数」という意味で使用していると思われる)を知ることはできない、としている。つまり、「東西両軍兵員」の実数を示すまとまった史料は存在しない、という意味であろう。

下線bでは、しかしながら、慶長5年(1600)の4月27日付島津義久宛島津義弘書状に、徳川家康による上杉討伐の「兵賦」(=「軍役」という意味で使用していると思われる)として100石につき3人(=1万石に換算すると300人になる)であることを指摘している。

この4月27日付島津義久宛島津義弘書状は、日本戦史編纂委員撰『日本戦史関原役・文書補伝』(版権所有・参考本部)<sup>(3)</sup>の「附録」の「第十九號」<sup>(4)</sup>として収録されている<sup>(5)</sup>。

下線cでは、この基準(=100石につき3人)をもとに「東軍諸將ノ兵」を試算した、としている。

つまり、関ヶ原の戦いにおける諸将の軍役人数(兵力数)を直接示す史料はまとめて存在しないので、家康による上杉討伐の軍役人数賦課基準(=100石につき3人)をもとに「東軍諸將」の兵力数を試算した、としている。よって、この試算の基準は上杉討伐の軍役人数賦課基準(関ヶ原の戦いについての軍役人数賦課基準を示すものではない)であるという点は注意する必要がある。そして、あくまで試算である点にも注意する必要がある。

そして、「西軍ノ兵額ハ未タ法數ト為スヘキモノヲ得ス因テ姑ク東軍ノ例ニ依リテ算スレハ左ノ如シ」<sup>(6)</sup>としているが、これは、「西軍」の兵力数の実数は軍役人数の賦課基準を示す史料がないので、とりあえず、上述した「東軍」の軍役人数賦課基準(=100石につき3人)をもとに試算する、という意味であろう。

こうした試算<sup>(7)</sup>も一つの考え方であるが、関ヶ原の戦い(この場合は、慶長庚子の大乱[=庚子争乱]、いわゆる関ヶ原大乱を指す)が慶長5年であったことを考慮すると、関ヶ原の戦いに参戦した諸将の軍役人数は豊臣政権下における軍役人数を大きく逸脱するものではなかったはずである。

そのため、天正17年（1589）以降の小田原の陣、文禄の役、慶長の役における諸将の軍役人数をまとめたものが表1である。

表1では、そのほか、慶長5年8月下旬の時点における家康方諸将の兵力数を記した「（慶長5年）8月21日付福島正則覚書」（以下、「福島正則覚書」と略称する）<sup>(8)</sup>の兵力数、同年8月上旬の時点における石田・毛利方の兵力数を記した「備口人数」<sup>(9)</sup>の兵力数についても記載した。

表1では、さらに、1万石につき300人の軍役人数を基準に推計した人数（兵力数）についても記載した（慶長5年の時点での推計値はF〔以下、F値と略称する〕、慶長5年以外の時点での推計値はM〔以下、M値と略称する〕とした）。

本稿では、表1における諸将の軍役人数（兵力数）をもとに、関ヶ原の戦いにおける諸将の軍役人数（兵力数）について予察的に考察したい。

なお、軍役については、本役、半役、三分一役、四分一役<sup>(10)</sup>などの区分がある。

## 1. 徳川家康方諸将の軍役人数（兵力数）について

徳川家康方諸将の中で主要な部将の軍役人数（兵力数）について、表1をもとに以下に検討する。

### ▼徳川家康・結城秀康

徳川家康は、慶長5年の時点で日本国内最大の石高（255万7000石）である。関東に国替になったのは天正18年（1590）であり、その時点では242万石であった<sup>(11)</sup>。

徳川家康の豊臣政権下での軍役人数は、3万が2例、2万が1例、1万5000が1例、5000が1例である（表1参照。以下、諸将の石高についても表1参照。）。3万を本役と考えた場合、1万5000は半役になる。

家康の豊臣政権下での軍役人数の最大値は3万であるが、表1を見るとわかるように、豊臣政権下での軍役人数の最大値3万は、家康以外では毛利輝元だけである。

家康の石高をもとに、1万石につき300人の軍役人数を基準に推計した人数（兵力数）（F値）は7万6710人であり、突出した数値となるが、上述したように、豊臣政権下での家康の軍役人数の最大値が3万であることを考慮すると、3万が動員できる最大値だったのであろう。

表1を見るとわかるように、徳川秀忠（家康の三男。慶長5年の時点で22歳〔数え年〕）は、豊臣政権下では軍役を賦課されたことがない。つまり、慶長5年の時点で徳川秀忠には軍役人数（=直属の兵力数）が存在しておらず、慶長5年の中山道出陣は初陣になるのであり、家康が秀忠に対してどれだけの戦果を期待したのか疑問である。

結城秀康（家康の二男。慶長5年の時点で27歳〔数え年〕）は、すでに豊臣政権下で軍役を賦課されているので（表1参照。F値が3030であるので1005は三分一役と考えられる。）、本来であれば、結城秀康が中山道を西上し、徳川秀忠が宇都宮城に在陣すべきであろうが、実際には逆になっている。この意味については、今後、検討する必要があろう（例えば、家康が秀忠に対して大きな戦果を期待せずに中山道を行軍だけさせた、後に家康が秀忠と合流したとしても最初から大した戦果を期待していなかった、など）。

上述したように、家康の最大動員兵力数が3万とすると、軍役人数が存在していない秀忠に対して、3万の中

## 関ヶ原の戦いにおける諸将の軍役人数(兵力数)についての予察的考察（白峰）

から一定の兵力数をまわしたことになるが、詳しいことは不明である。いずれにしても、秀忠の兵力数が過大な兵力数でなかつたことは確かであろう。

### ▼伊達政宗

伊達政宗の豊臣政権下での軍役人数は、500 が 1 例、1258 が 1 例、1000 が 1 例である。M 値 (15450) と比較すると、10 分の 1 以下であるが、文禄の役では、伊達政宗の所領は九州から見て遠隔地であったため、このような少ない数値になった可能性が考えられる。

### ▼池田輝政

池田輝政の豊臣政権下での軍役人数は、2800 が 1 例、2500 が 2 例である。これらの数値は、池田輝政の F 値 4560 と比較すると、半役であった可能性がある。

前掲「福島正則覚書」の 6500 は、F 値 (4560) の 1.4 倍（小数点第二位を四捨五入）である。池田輝政は西上する家康方軍勢の中では、福島正則と共に、それぞれ組を編成する組頭であったので<sup>(12)</sup>、福島正則の 6500（後述）と人数をそろえたと考えられる。本来の軍役人数以上の動員が可能であったのは、東海道を西上する段階で池田輝政の居城地である三河国吉田に立ち寄って増員することができたからと思われる。

### ▼細川忠興

細川忠興の石高は天正 15 (1587) ~ 慶長 5 年は 11 万石であり、慶長 5 年に 6 万石を加増された。よって、豊臣政権時代の軍役人数の基準石高は 11 万石である。

細川忠興の豊臣政権下での軍役人数は 2000 ~ 3500 である。前掲「福島正則覚書」では 2000 であり、F 値 (5100) の半分以下であるが、豊臣政権下での軍役人数と比較すると、極端に少ないわけではない。

### ▼福島正則

福島正則の石高は天正 15 ~ 文禄 4 年 (1595) は 11 万 3000 石であり、文禄 4 年から 20 万石になったので、文禄 2 年 (1593) までの豊臣政権時代の軍役人数の基準石高は 11 万 3000 石として考えるべきである。

福島正則の豊臣政権下での軍役人数は 1800 ~ 4800 である。M 値 (3390) と比較すると、1800 は半役であったと考えられる。

前掲「福島正則覚書」では 6500 であり、F 値 (6000) に近似する数値である。上述したように、池田輝政が F 値 (4560) の 1.4 倍の 6500 を動員したのは、福島正則と共に、それぞれ組を編成する組頭であったので、福島正則の 6500 と同じ人数にそろえたと考えられる。

### ▼加藤清正

加藤清正の豊臣政権下での軍役人数は 6790 ~ 1 万なので、最大値は 1 万である。この 1 万は F 値 (5850) の 1.7 倍（小数点第二位を四捨五入）である。豊臣政権からこれだけの軍役人数（1 万）を賦課されたのは石高の表高より実高が高かったということであろうか。加藤清正の豊臣政権下での軍役人数の最大値が 1 万であったことは注目される。このことが慶長 5 年の九州における加藤清正の迅速かつ果敢な軍事行動と関係するのかも知れない。

### ▼浅野幸長

前掲「福島正則覚書」では浅野幸長は 5000 であり、浅野長政（父）・浅野幸長（子）の F 値 (6750) より少ないが、

これは浅野長政が徳川秀忠に従って中山道を進軍したことと関係すると思われる。

豊臣政権下では、浅野幸長の軍役人数は3000（慶長2年）、2500（文禄2年）であるので、前掲「福島正則覚書」での浅野幸長の5000は、それと比較すると、1.7（小数点第二位を四捨五入）～2倍である。

前掲「福島正則覚書」での浅野幸長の5000は、池田輝政の6500、福島正則の6500の次に多い。その理由としては、西上する時に居城地の甲斐国府中に立ち寄って増員することができたからと思われる。

#### ▼黒田長政

豊臣政権下での黒田長政の軍役人数は5000～5082であり（3500の一例を除く）、前掲「福島正則覚書」では1300であるので、3分の1以下である。F値（5460）は豊臣政権下での軍役人数5000～5082（3500の一例を除く）と近似する。

前掲「福島正則覚書」では1300であることから、それ以外の軍役人数の兵力数（軍役人数を5000とすると、残りの3700）は国許（豊前国中津）に残してきたことになる。黒田孝高の九州における迅速かつ果敢な軍事行動が可能であったのは、こうしたことによるものと考えられる。

よって、黒田長政が家臣のほとんどを関ヶ原の戦いに連れていった、というのは根拠のない単なる俗説にすぎないことがわかる。

なお、黒田長政の1300（前掲「福島正則覚書」）は、後述する藤堂高虎（藤堂高虎の石高は黒田長政の石高の半分以下）の1500（前掲「福島正則覚書」）よりも少ない。その理由は、居城地（豊前国中津）が遠隔地であったため、増員ができなかつことによるものと思われる。

#### ▼前田利家・前田利長

豊臣政権下での前田利家（父）の軍役人数は、7000が1例、8000が1例であり、7000はM値の7050に近似する。

前掲「備口人数」に前田利長（子）の名前はないため、慶長5年8月上旬の時点での前田利長の軍役人数（兵力数）は史料的には明確ではないが、F値（2万5050）からすると、2万5000程度の軍役人数は可能であったと考えられる。この軍役人数をもとに、北国での前田利長の動向を検討すべきかも知れない。

#### ▼藤堂高虎

藤堂高虎が7万石になったのは文禄4年であり、慶長2年の時点では軍役人数は2800である。7万石のF値は2100なので、その1.3倍（小数点第二位を四捨五入）になる。

しかし、前掲「福島正則覚書」では1500なので、慶長2年の軍役人数2800の約半分である。その理由は、上述した黒田長政と同様に、居城地（伊予国板島）が遠隔地であったため、増員ができなかつことによるものと思われる。

#### ▼加藤嘉明

加藤嘉明は慶長2年から10万石になっており、そのF値は3000である。前掲「福島正則覚書」では1600であるので、F値の約半分である。1600という数値は、慶長2年の軍役人数2400よりも少ない。その理由は、上述した黒田長政、藤堂高虎と同様に、居城地（伊予国松前）が遠隔地であったため、増員ができなかつことによるものと思われる。

## 2. 石田・毛利方（豊臣公儀方）諸将の軍役人数（兵力数）について

石田・毛利方（豊臣公儀方）諸将の中で主要な部将の軍役人数（兵力数）について、表1をもとに以下に検討する。

### ▼上杉景勝

上杉景勝は慶長3年（1598）に国替により、陸奥国会津若松城主（120万石）になった。国替前の越後国春日山城主の時は55万1000石であった。55万1000石の時代の豊臣政権下の軍役人数は、5000が2例、3000が1例、4500が1例である。M値は1万6530であるので、5000は三分一役と思われる。

120万石の時代の上杉景勝のF値は3万6000であるが、慶長5年の時点での軍役人数を示す一次史料は管見では見つからない。

ちなみに、石高が近似している毛利輝元は120万5000石であるが、前掲「備口人数」では軍役人数は4万1500である。この点については後述する。

### ▼青木紀伊守（青木重治）

青木紀伊守が8万石の時代における豊臣政権下の軍役人数は、1000が3例である。M値は2400であるので、1000は半役と思われる。

青木紀伊守が20万石の時代におけるF値は6000であり、前掲「備口人数」の6000と一致する。このことは、前掲「備口人数」の軍役人数の賦課基準が1万石につき300人であることの傍証になるかも知れない。

### ▼丹羽長重

丹羽長重（12万5000石）のF値は3750であるが、前掲「備口人数」に丹羽長重の記載はないため、関ヶ原の戦いがあった慶長5年の時点での軍役人数は不明である。丹羽長重は北陸方面では、前田利長と敵対したが、上述したように、前田利長のF値が2万5050であることを考慮すると、兵力数では6分の1以下であり、圧倒的に不利であることがわかる。

### ▼大谷吉継

大谷吉継（5万石）のF値は1500であり、文禄2年の軍役人数1535、1530はF値に近似している。前掲「備口人数」では大谷吉継は1200であり、F値（1500）より300少ないが、文禄2年の軍役人数に1200という事例がある。よって、前掲「備口人数」の1200は過去の軍役人数と一致する数値である。

### ▼中川秀成

中川秀成（6万6000石）のF値は1980であるが、前掲「備口人数」では1500となっていて、F値の1980よりは少ない。しかし、前掲「備口人数」の1500は、文禄2年の軍役人数1520と近似し、慶長2年の軍役人数1500と一致する。文禄2年の軍役人数2000は、F値（1980）に近似する。

中川秀成は豊臣奉行衆の要請に従い、大坂に軍勢を派遣したが、中川秀成は豊後に留まった<sup>(13)</sup>。前掲「備口人数」の1500を実際に中川秀成が大坂に遣わしたこと<sup>(14)</sup>、中川秀成は、豊臣政権下における従来の軍役人数（=本役）を遣わしたことになり、中川秀成自身は上坂しなかったものの石田・毛利方であったと見なすことができる。

### ▼石田三成

石田三成が19万4000石（近江国佐和山）になったのは文禄4年であり、それ以前の石高は不明であるが、

天正17年の軍役人数1500から逆算すると(1万石につき300人の賦課と仮定して)、1500が本役の場合は5万石、1500が半役の場合は10万石になる。

文禄2年の軍役人数1646、1640は天正17年の軍役人数1500に近似するので、文禄2年の時点では天正17年と比較して石高は同じであった可能性が考えられる。

前掲「備口人数」の6700は、石田三成のF値(5820)の1.2倍(小数点第二位を四捨五入)であり、過大な数値であると思われるが(文禄4年以前の石高は不明であるものの、豊臣政権下でのこれまでの石田三成の軍役人数と比較しても過大である)、関ヶ原の戦いで石田三成が実際に6700を動員できたのかどうかという点も含めて、前掲「備口人数」の6700という数値については今後の検討を要する。

豊臣政権下におけるこれまでの石田三成の軍役人数を参考にすると、関ヶ原の戦いで石田三成が実際に動員できたのは1500～2000の間の数値であったと推測できる。

#### ▼小西行長

小西行長(20万石)のF値は6000であるが、豊臣政権下での軍役人数は7000が5例(天正20年、慶長2年)あり、1000多い。それに比較して、前掲「備口人数」では2900であり、7000の半分以下である。小西行長の石高(20万石)からすると、2900はかなり少ない数値であるが、その理由は不明である。

いずれにしても、関ヶ原の戦いでは、小西行長の軍役人数は、それまでの豊臣政権下での小西行長の軍役人數と比較してかなり少なかったことがわかり、関ヶ原本戦での敗北の原因とも直接関係するのかも知れない。

#### ▼松浦鎮信

前掲「備口人数」では小西行長の与力4人で4000となっているが、この小西行長の与力4人とは、松浦鎮信、大村喜前、五島純玄、有馬晴信のことを指すと考えられる。小西行長の与力4人で4000であるから、平均すると与力1人あたり1000になる。

松浦鎮信(6万3000石)のF値は1890であるが、豊臣政権下の軍役人数は3000が5例、2000が1例であり、2000は1890に近似するものの、3000は1000以上多い数値になる。

軍役人数3000から逆算すると(1万石につき300人の賦課と仮定して)、3000が本役の場合は10万石になる。よって、松浦鎮信は豊臣政権下では10万石と見なされて軍役人数を賦課されていた可能性がある。

#### ▼大村喜前

大村喜前(2万7000石)のF値は810であるが、豊臣政権下の軍役人数は1000が5例、700が1例であり、1000はF値(810)よりも190多い。

#### ▼五島純玄

五島純玄(1万5000石)のF値は450であるが、豊臣政権下の軍役人数は700が5例、500が1例であり、700はF値(450)よりも250多い。

#### ▼有馬晴信

有馬晴信(4万石)のF値は1200であるが、豊臣政権下の軍役人数は2000が5例、1300が1例であり、2000はF値(1200)よりも800多い。

上述したように、松浦鎮信、大村喜前、五島純玄、有馬晴信は小西行長の与力であるため、この4人をまと

関ヶ原の戦いにおける諸将の軍役人数(兵力数)についての予察的考察（白峰）  
めて動かすため、それぞれの石高のF値よりも多めの端数がない数値に軍役人数を豊臣政権が設定して賦課した可能性が考えられる。

その傍証として、前掲「備口人数」では小西行長の与力4人（松浦鎮信、大村喜前、五島純玄、有馬晴信）で4000となっていて、端数がない数値になっている。松浦鎮信、大村喜前、五島純玄、有馬晴信のそれぞれのF値を合計すると4350になり、4000と近似した数値になる。

#### ▼鍋島直茂・鍋島勝茂

鍋島直茂の豊臣政権下での軍役人数は、1万2000が5例あり、そのうち1例（慶長2年）は鍋島直茂（父）・鍋島勝茂（子）で1万2000である。よって、慶長2年以降は、鍋島直茂・鍋島勝茂で豊臣政権から軍役を賦課された（鍋島勝茂の石高は、鍋島直茂の石高に含まれる）、と考えられる。

この点を考慮すると、前掲「備口人数」において「龍造寺」（＝龍造寺高房）で9800というのは、実質的には鍋島直茂・鍋島勝茂で9800というように理解できる。

龍造寺高房・龍造寺政家・鍋島直茂のそれぞれのF値を合計すると、1万770になり、前掲「備口人数」の9800に近似する。

前掲「備口人数」の9800は、豊臣政権下の軍役人数1万2000と比較すると、2200少ない数値になる。

関ヶ原の戦いでは、鍋島勝茂は上坂したが、鍋島直茂は国許（肥前国佐賀）に在国していたので、実際に1万2000を上坂させたとは考えにくい。その意味では、前掲「備口人数」の1万2000という数値は、豊臣公儀（石田・毛利連合政権）から賦課された軍役人数（つまり目標値）である可能性が高い。このことは、前掲「備口人数」における他の諸将の軍役人数にも言えることであろう。

#### ▼相良長毎

相良長毎の豊臣政権下での軍役人数は、800が5例あり、500が1例ある。前掲「備口人数」は800があるので、それまでの豊臣政権下での軍役人数と一致する。相良長毎のF値は660があるので、800よりは140少ない。

相良長毎の豊臣政権下での軍役人数800と前掲「備口人数」の800が一致する、ということは、豊臣公儀（石田・毛利連合政権）は、関ヶ原の戦いの時の諸将に対する軍役賦課基準を、それまでの豊臣政権の軍役賦課基準と同じ基準で賦課したケースがあったことになる。

このことは、家康を豊臣政権から放逐した新しい豊臣公儀（石田・毛利連合政権）が、秀吉の時代の豊臣政権下での軍役賦課権をそのまま継承していることを示している。

「（慶長5年）9月7日付島津忠恒宛島津義弘書状写」<sup>(15)</sup>では、相良長毎も「其分」（＝秋月種長が軍役のほかに人数を数多召し連れたこと）と聞こえた、としているが、具体的な人数はわからない。

#### ▼毛利吉成・毛利吉政

毛利吉成の豊臣政権下での軍役人数は、2000が5例あり、そのうち1例（慶長2年）は毛利吉成（父）・毛利吉政（子）で2000である。よって、慶長2年以降は、毛利吉成・毛利吉政で豊臣政権から軍役を賦課された（毛利吉政の石高は、毛利吉成の石高に含まれる）、と考えられる。こうした事例は、上述した鍋島直茂（父）・鍋島勝茂（子）のケースと同様である。

毛利吉成のF値は1800であり、2000より200少ない。前掲「備口人数」には毛利吉成の記載はないが、毛利

吉成・毛利吉政で2000くらいの軍役人数を賦課された、と思われる。

#### ▼島津義弘

島津義弘の豊臣政権下での軍役人数は、10000が5例、7000が1例、2128が2例ある。この軍役人数は、島津家全体としての軍役人数と思われる。

天正15～慶長4年（1599）までの島津義久の石高は不明であるが<sup>(16)</sup>、軍役人数10000から逆算すると（1万石につき300人の賦課と仮定して）、10000が本役の場合は33万石くらいになる。

前掲「備口人数」では島津義弘は5000になっている。この5000は上記の豊臣政権下での軍役人数10000の半分であることから、半役として軍役人数を島津家に対して賦課した可能性を考えられる。

しかし、「（慶長5年）8月20日付本田正親宛島津義弘書状写」<sup>(17)</sup>では、「さつまの仕立僅千人之内にて、爰元を仕舞候事」としているので、8月20日の時点で島津義弘のもとにいた島津家の兵力数は1000人以内であった、と思われる。

そのため、「（慶長5年）9月7日付島津忠恒宛島津義弘書状写」<sup>(18)</sup>では、9月7日の時点で「都合人数」として5000を必ず派遣するように島津忠恒に対して島津義弘は要請しているが、国許から5000が派遣されたかどうかは不明である（実際に国許から5000が派遣された可能性は低い）。

よって、前掲「備口人数」での島津義弘の軍役人数5000は、実際の動員人数ではなく、豊臣公儀（石田・毛利連合政権）から指示された目標値であった、と考えられる。

島津義弘は関ヶ原本戦に参戦しているが、こうした少数の兵力数（上述したように1000人以内か？）で参戦したことは考慮すべきである。

#### ▼高橋元種・秋月種長・伊東祐兵・島津豊久

豊臣政権下の軍役人数については、高橋元種・秋月種長・伊東祐兵で1セットにして1500、或いは、それに島津豊久を加えて1セットにして2000、または1300という事例がある。この4人の部将はいずれも日向国内に所領がある部将である。よって、豊臣政権としては日向国内の部将をまとめて1セットにして軍役人数を賦課したことになる。

前掲「備口人数」では、高橋元種・秋月種長・伊東祐兵はいずれも「勢田橋爪在番」になっている（島津豊久は前掲「備口人数」に記載がない）。

高橋元種・秋月種長・伊東祐兵で1セットにして1500、それに島津豊久を加えて1セットにして2000ということは、2000から1500を差し引くと、計算上は島津豊久は500になる。また、2000を4人の部将で平均すると1人500になる。

このように3人（或いは、4人）を1セットにして軍役人数を賦課するのは天正20年と文禄2年のみである。以下のように、文禄2年以降は、4人それぞれに対して軍役人数を賦課している。

#### ▼高橋元種

高橋元種の豊臣政権下での軍役人数は、741が2例、600が1例、800が1例である。前掲「備口人数」の800は、慶長2年の軍役人数800と一致する。高橋元種のF値は1500であるので、「備口人数」の800は半役であった可能性を考えられる。

▼秋月種長

秋月種長の豊臣政権下での軍役人数は、388が2例、300が1例、500が1例である。前掲「備口人数」の600は、慶長2年の軍役人数500よりも100多い。

「(慶長5年)9月7日付島津忠恒宛島津義弘書状写」<sup>(19)</sup>では、秋月種長も軍役のほかに人数を数多召し連れた、としている。この場合、具体的な人数はわからない。

▼伊東祐兵

伊東祐兵の豊臣政権下での軍役人数は、706が2例、500が1例である。前掲「備口人数」の500は、慶長2年の軍役人数500と一致する。伊東祐兵のF値は1710であるので、前掲「備口人数」の500は、三分一役であった可能性が考えられる。

▼島津豊久

島津豊久の豊臣政権下での軍役人数は、476が2例、800が1例である。前掲「備口人数」には島津豊久の記載はないので、関ヶ原の戦いの時の島津豊久の軍役人数は不明である。

島津豊久は豊臣政権下で島津義弘とは別に、軍役人数を豊臣政権から賦課されていたことは注目される。この点を考慮すると、関ヶ原本戦においても島津義弘と島津豊久は別々に軍役人数を動員していた(=それぞれ別々に備を立てていた)と考えられる。

▼増田長盛

増田長盛が20万石になるのは文禄4年であるが、文禄4年以降の豊臣政権下での軍役人数を示す一次史料は管見では見つからない。

前掲「備口人数」では3000になっている。F値は6000であるので、前掲「備口人数」の3000は半役である可能性が考えられる。増田長盛は三奉行の一人であり、豊臣公儀(石田・毛利連合政権)の中心人物であるため、半役になったのだろうか。前掲「備口人数」では、増田長盛は「大坂御留守居」になっているので、前線に出陣することを想定していなかったため半役になった可能性が考えられる。

▼毛利高政

毛利高政のF値は600である。毛利高政が豊後国内で2万石になるのは文禄2年からであるが、天正17年の軍役人数も600であるので、天正17年の時点でも2万石であった可能性がある。前掲「備口人数」には毛利高政の記載はないが、慶長5年の軍役人数もF値と同じ600であった可能性が考えられる。

▼戸田勝成

戸田勝成の豊臣政権下での軍役人数は、300が1例、290が1例、350が1例であり、300前後の数値である。戸田勝成のF値は300であり、数値としては近似する。前掲「備口人数」の500は、F値の300より200多い。

▼福原長堯

福原長堯の豊臣政権下での軍役人数は、500が2例である。前掲「備口人数」も500であり、数値としては一致する。前掲「備口人数」の500は、F値の360より140多い。

福原長堯の豊臣政権下での軍役人数500と前掲「備口人数」の500が一致する、ということは、豊臣公儀(石田・毛利連合政権)は、関ヶ原の戦いの時の諸将に対する軍役賦課基準を、それまでの豊臣政権の軍役賦課基

準と同じ基準で賦課したケースがあったことになる。

このことは、家康を豊臣政権から放逐した新しい豊臣公儀（石田・毛利連合政権）が、秀吉の時代の豊臣政権下での軍役賦課権をそのまま継承していることを示している。

#### ▼小早川隆景・小早川秀秋

小早川隆景（父）の豊臣政権下での軍役人数は、1万が4例、7000が1例、6596が1例、6600が1例である。

小早川隆景のM値は9210であるので、1万より790少ない。

小早川秀秋（養子）の豊臣政権下での軍役人数は、1万が1例である。この1万という数値は、上述した豊臣政権下での小早川隆景の軍役人数1万と一致するので、小早川隆景の軍役人数をそのまま継承していることになる（小早川隆景は慶長2年に死去した）。

小早川秀秋のF値は1万710であるので、小早川秀秋の豊臣政権下での軍役人数1万と近似する。こうした点を考慮すると、前掲「備口人数」では小早川秀秋は8000としているが、関ヶ原の戦いにおける小早川秀秋の動員人数は1万であった可能性も考えられる。すると、関ヶ原本戦において小早川秀秋の1万が突如として裏切ったことの影響は絶大であり、勝敗を決する影響をもたらしたことになろう。

小早川秀秋の豊臣政権下での軍役人数1万は、慶長の役の時の軍役人数であり、実際に慶長の役では渡海して出陣している（慶長2年の時点では16歳〔数え年〕）。慶長5年の関ヶ原の戦いの時点では19歳（数え年）であった。

#### ▼小早川秀包

小早川秀包の豊臣政権下での軍役人数は、1500が4例、1000が2例、400が2例である。前掲「備口人数」では小早川秀包は1000であるので、慶長5年から見て3年前の豊臣政権下での軍役人数1000（慶長2年）と一致する。小早川秀包のF値は3900であるが、豊臣政権下での軍役人数はその数値よりも少ない。

#### ▼立花宗茂

立花宗茂の豊臣政権下での軍役人数は、2500が4例、1700が1例、1133が2例、5000が1例である。5000を本役と考えた場合、2500は半役になる。前掲「備口人数」では、立花宗茂は3900であるので、上記の豊臣政権下での軍役人数5000よりは1100少ない。立花宗茂のF値は3960であるので、前掲「備口人数」の3900に近似する。

「（慶長5年）8月21日付吉田清孝宛島津義弘書状写」<sup>(20)</sup>では、立花宗茂は1300の軍役のところ、4000程を召し連れた、としている<sup>(21)</sup>。

しかし、立花宗茂のF値が3960であることや、立花宗茂の豊臣政権下での軍役人数において5000という例があることを考慮すると、立花宗茂の軍役が1300とする、上記の島津義弘書状写の記載は、数値として低すぎるように考えられる。立花宗茂が4000程を召し連れた、としている点は、前掲「備口人数」の3900に近似するので、豊臣公儀（石田・毛利連合政権）から指示された軍役人数をそのまま立花宗茂が召し連れた、と考えた方がよかろう。

#### ▼高橋直次

高橋直次の豊臣政権下での軍役人数は、800が3例、500が2例、288が1例、290が1例である。前掲「備口人数」には高橋直次の記載はない。高橋直次のF値は540であるので、上記の豊臣政権下での軍役人数500に近似する。

▼筑紫広門

筑紫広門の豊臣政権下での軍役人数は、900が4例、600が1例、327が1例、330が1例、500が1例である。前掲「備口人数」では、筑紫広門は500であるので、慶長5年から見て3年前の豊臣政権下での軍役人数500（慶長2年）と一致する。筑紫広門のF値は540であるので、上記の豊臣政権下での軍役人数500に近似する。

▼長宗我部元親・長宗我部盛親

長宗我部元親（父）の豊臣政権下での軍役人数は、3000が4例、2000が1例、2590が2例である。長宗我部元親のM値は2940であるので、豊臣政権下での軍役人数3000に近似する。

長宗我部元親は慶長4年に死去して、長宗我部盛親（子）が家督を継いだ。前掲「備口人数」では、長宗我部盛親は2100である。この数値は、長宗我部元親の豊臣政権下での軍役人数2000に近似する。

通説では、長宗我部元親の石高は9万8000石、長宗我部盛親の石高は22万2000石であるが、22万2000石でF値を算出すると6660になり、前掲「備口人数」の2100と比較すると、過大な数値になるので、前掲「備口人数」の2100という点を考慮すると、慶長5年の時点の長宗我部盛親の石高は、長宗我部元親の石高9万8000石と同じであった可能性が考えられる。

「（慶長5年）8月21日付吉田清孝宛島津義弘書状写」<sup>(22)</sup>では、長宗我部盛親は大体2000の軍役であるが、この度、（秀頼様への）御忠節のため、5000を召し連れた、としている<sup>(23)</sup>。この場合の大体2000の軍役とは、前掲「備口人数」の2100とほぼ一致する。

長宗我部盛親が2000の軍役のところ、5000を召し連れた、とすると、2.5倍ということになる。

「（慶長5年）9月7日付島津忠恒宛島津義弘書状写」<sup>(24)</sup>では、長宗我部盛親は人数5000、鉄砲1500丁を召し連れた、としている。この場合の鉄砲1500丁というのが規定（軍役）の鉄砲数を上回っているのかどうかはよくわからないが、長宗我部盛親（慶長5年の時点で9万8000石と仮定して）クラスの部将で1500丁の鉄砲を調達して実戦に投入できるという点には注意したい。

▼毛利輝元

毛利輝元の豊臣政権下での軍役人数は、3万が5例<sup>(25)</sup>、2万5000が1例、1万6600（=1万3600+3000）が1例、1万7060が1例である（3万を本役と考えた場合、1万6600、1万7060は半役にあたると考えられる）。この中で最大値は3万であり、最大値3万は日本国内の軍役人数としては、上述した徳川家康だけである。

毛利輝元のF値は3万6150であり、上記の豊臣政権下での軍役人数3万よりも6150多い。前掲「備口人数」では毛利輝元は4万1500であるが、前掲「備口人数」では、その内訳として、1万は毛利秀就（毛利秀元カ）に付け置き、（残りの）3万余は毛利輝元自身が召し連れて出馬、としているので、この場合も毛利輝元だけを見ると3万余になる。

▼宇喜多秀家

宇喜多秀家の豊臣政権下での軍役人数は、1万が3例<sup>(26)</sup>、7785が1例、8000が1例である。前掲「備口人数」は1万8000であり、F値の1万7220は1万8000に近似する。

しかし、前掲「備口人数」の1万8000は、宇喜多秀家の豊臣政権下での軍役人数の最高値1万よりも8000多いので、数値としては過大であり、関ヶ原の戦いで実際に宇喜多秀家が1万8000を動員できたとは考えにくい

ので、関ヶ原の戦いでは宇喜多秀家は1万が動員できる最大値であったと考えられる。

#### ▼長束正家

長束正家の豊臣政権下での軍役人数は、500が1例である。長束正家が5万石になるのは文禄4年であるが、文禄4年以降の豊臣政権下での軍役人数を示す一次史料は管見では見つからない。前掲「備口人数」では長束正家は1000である。長束正家のF値は1500であるので、前掲「備口人数」の1000は、1500と比較すると500少ないことになる。これは長束正家が三奉行の一人であり、豊臣公儀の中心人物であることを考慮したためであろうか。

#### ▼脇坂安治

脇坂安治の豊臣政権下での軍役人数は、1000が1例、900が2例、1200が1例であり、1000前後の数値である。前掲「備口人数」では脇坂安治は1200であり、慶長2年の豊臣政権下での軍役人数1200と一致する。脇坂安治のF値は990であり、1000より10少ない。

#### ▼早川長政

早川長政の豊臣政権下での軍役人数は、170が1例、347が1例、340が1例である。340が本役であるとすると、170は半役になる。早川長政は前掲「備口人数」に記載はないが、F値は600であり、豊臣政権下での軍役人数の最大値340の1.8倍（小数点第二位を四捨五入）である。よって、早川長政の実際の動員可能な軍役人数は340が最大値であろう。

#### ▼太田一吉・太田一成

太田一吉は天正13年（1585）に1万石になり<sup>(27)</sup>、慶長2年に6万5000石になった。太田一吉の豊臣政権下での軍役人数は、300が1例、200が1例、80が1例、110が1例であり、これらはいずれも1万石の時代である。390人の1例は6万5000石の時代である。

前掲「備口人数」では、太田一吉（父）・太田一成（子）として1020である。太田一吉のF値は1950であるので、前掲「備口人数」の1020よりも930多い。

#### ▼織田秀信

織田秀信の豊臣政権下での軍役人数は、6000が1例、4018が1例、4000が1例であり、4000～6000ということになる。前掲「備口人数」では織田秀信は5300であるので、豊臣政権下での軍役人数4000～6000の間の数値になる。前掲「備口人数」の5300は、F値の3990よりも1310多い。

関ヶ原の戦いの前哨戦である岐阜城攻防戦において、家康方諸将の軍役人数の合計は4万1100である<sup>(28)</sup>。前掲「備口人数」の織田秀信の5300と比較すると、家康方諸将の軍役人数の合計4万1100は、織田秀信の5300の7.8倍（小数点第二位を四捨五入）であるから兵力数の差からみて織田秀信が敗北したのは当然であった。

#### ▼蜂須賀家政

蜂須賀家政の豊臣政権下での軍役人数は、2800が1例、2500が2例、7200が4例、5000が1例、4500が2例である。数値としては、2500～7200まで数値の幅が広い。前掲「備口人数」での蜂須賀家政は2000であり、豊臣政権下での軍役人数（2500～7200）よりも少ない。その理由は、蜂須賀家政が出陣せず、家老が代理で出陣したことによるものであろう。この点は、後述する生駒親正も同様であり、「備口人数」での生駒親正の軍役

人数（1000）はF値の2670の半分以下である。

なお、蜂須賀家政（父）は石田・毛利方であり、蜂須賀至鎮（子）は家康方である。前掲「福島正則覚書」には蜂須賀至鎮の記載がないので、関ヶ原の戦いにおける蜂須賀至鎮の軍役人数は不明である。

#### ▼生駒親正・生駒一正

生駒親正の豊臣政権下での軍役人数は、2200が2例、2450が2例、2500が1例、4000が1例、5500が2例、5700が1例である。数値としては、2200～5700まで数値の幅が広い。生駒一正の豊臣政権下での軍役人数は、2700が2例である。

生駒親正（父）は石田・毛利方であり、生駒一正（子）は家康方である。生駒親正は15万石であるが、生駒一正の6万1000石（慶長2年～）は生駒親正（15万石）領内であるので、差し引くと生駒親正は8万9000石になる。8万9000石のF値は2670であるが、前掲「備口人数」では1000であり、半分以下である。その理由は、生駒親正が出陣せず、家老が代理で出陣したことによるものであろう。

生駒一正のF値は1830であるが、前掲「福島正則覚書」には生駒一正の記載がないので、関ヶ原の戦いにおける生駒一正の軍役人数は不明である。

## おわりに

本稿での検討によって、諸将の豊臣政権下の軍役人数<sup>(29)</sup>については、同じ部将の軍役人数について、同数の軍役人数が複数回出てくるケースが確認できた。

のことから、豊臣政権では、部将の石高との一定程度の照応関係はあるものの、その部将のデフォルト値（=豊臣政権から指定された設定値）の軍役人数が決まっていた（徳川家康の3万、加藤清正の1万、黒田長政の5000、毛利輝元の3万、宇喜多秀家の1万、島津義弘の1万、小西行長の7000、毛利吉成の2000、相良長毎の800など）、と考えられる。そして、デフォルト値の軍役人数が、その部将が動員可能な上限値（最大値）でもあった、と考えられる（ただし、上述した長宗我部盛親のように、関ヶ原の戦いの際に2000の軍役のところ、5000〔2000の2.5倍〕を召し連れたケースもある）。

前掲「備口人数」の各数値は、そのデフォルト値をベースに決められた可能性が高い（ただし、前掲「備口人数」に記載された部将の中にはデフォルト値を超える例外的な数値〔石田三成、宇喜多秀家〕もある）。

上述したように、相良長毎の豊臣政権下での軍役人数800（相良長毎の場合、800がデフォルト値と考えられる）と前掲「備口人数」の800が一致する、ということは、豊臣公儀（石田・毛利連合政権）は、関ヶ原の戦いの時の諸将に対する軍役賦課基準を、それまでの豊臣政権の軍役賦課基準と同じ基準で賦課したケースがあったことになる。

このことは、家康を豊臣政権から放逐した新しい豊臣公儀（石田・毛利連合政権）が、秀吉の時代の豊臣政権下での軍役賦課権をそのまま継承していることを示している。

表1を見るとわかるように、豊臣政権下での軍役人数で最大値が1万以上の部将は、徳川家康（3万）、毛利輝元（3万）、鍋島直茂（1万2000）、鍋島直茂・鍋島勝茂（1万2000）、加藤清正（1万）、島津義弘（1万）、小早川隆景（1万）、小早川秀秋（1万）、宇喜多秀家（1万）だけである。このように、小早川秀秋は当時、日本国内でも有数の

軍役人数を有する部将であった。

関ヶ原本戦で裏切ったことにより勝敗を決定付けた小早川秀秋は、前掲「備口人数」では8000であるが、豊臣政権下でのこれまでの軍役人数からすると1万を動員していた可能性がある。

それに対して、石田三成、島津義弘、宇喜多秀家、小西行長、大谷吉継、島津豊久の合計人数は、前掲「備口人数」の合計は3万8000であるものの、本稿で検討した結果の軍役人数の合計では1万7900以下であり（表2参照）、小早川秀秋の軍役人数1万と比較した場合、小早川秀秋が裏切った時の影響力は勝敗を決するほど決定的なものであったことが、軍役人数の比較から理解できる。

豊臣政権から軍役人数を賦課されるということは、その部将がそれだけの人数（例えば、1万）の軍勢を指揮して戦うことができる、ということを意味した。例えば、小早川秀秋は慶長の役では1万の軍役人数を豊臣政権から賦課されており、渡海して実戦経験があった。そのうえで、慶長5年（慶長5年の時点では19歳〔数え年〕）の関ヶ原本戦に参戦したのである、戦場での裏切りは確信をもって小早川秀秋自身の判断でおこなった、と思われる。

これに対して、徳川秀忠は豊臣政権下で軍役を賦課されたことがなかった（徳川秀忠は慶長5年の時点で22歳〔数え年〕）。これは何を意味するのであろうか。まず、軍役を賦課されたことがない、ということは、豊臣政権から所領を持った自立（独立）した大名として見なされていない、ということになる。そして、軍役人数を率いての実戦経験がなかった、ということにもなる。この点を考慮すると、慶長5年の関ヶ原の戦いの時に、家康は秀忠に対して大きな戦果を期待せずに中山道を行軍だけさせた、後に家康が秀忠と合流したとしても最初から大した戦果を期待していなかった、などの想定ができる。そうした点から秀忠の中山道行軍を俯瞰して考える必要がある。

また、家康のデフォルト値の軍役人数が3万であったことを考慮すると、家康の動員可能な最大値が3万であったことになり、家康が7～8万も動員することは不可能であったことになる。

### 〔註〕

- ( 1 ) 日本戦史編纂委員撰『日本戦史・関原役』（版権所有・参謀本部、元真社発行、1893年初版、1911年三版）。
- ( 2 ) 前掲『日本戦史・関原役』(385～386頁)。
- ( 3 ) 日本戦史編纂委員撰『日本戦史・関原役・文書補伝』（版権所有・参謀本部、元真社発行、1893年初版、1911年三版）。
- ( 4 ) 前掲『日本戦史・関原役・文書補伝』(17～18頁)。
- ( 5 ) 『鹿児島県史料・旧記録後編三』（鹿児島県、1983年、537～538頁）にも「（慶長5年）4月（卯月）27日付島津義久宛島津義弘書状写」が収録されている。該当箇所は「爰元ハ百石ニ三人役ニ被仰付、奥州へ出張之由候」と記されている。
- ( 6 ) 前掲『日本戦史・関原役』(390頁)。
- ( 7 ) 前掲『日本戦史・関原役』(386～393頁)における諸将の各兵力数の表。
- ( 8 ) 「（慶長5年）8月21日付福島正則覚書」（拙著『新解釈関ヶ原合戦の真実－脚色された天下分け目の戦い』、

宮帶出版社、2014年、115頁の表4)。「(慶長5年)8月21日付福島正則覚書」(「岡文書」)の史料典拠は、『藤堂高虎関係資料集・補遺』(三重県史資料叢書5) (三重県編集・発行、2011年、97~98頁)。

(9) 図録『石田三成と西軍の関ヶ原合戦』(長浜市長浜城歴史博物館編集・発行、2016年、16~17頁の「備口人数」〔真田宝物館蔵〕1通の写真、118~119頁の活字翻刻)。

(10) 「小田原陣立書」(名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』4、吉川弘文館、2018年、2906号文書、75頁)。

(11) 『角川新版日本史辞典』(角川書店、1996年、1265~1272頁、「豊臣大名表」)。以下、諸将の石高については、この「豊臣大名表」に依拠した。

(12) 前掲「(慶長5年)8月21日付福島正則覚書」(前掲・拙著『新解釈関ヶ原合戦の真実—脚色された天下分け目の戦い』、115頁の表4)。

(13) 入江康太「近世初期豊後国の政治構造—関ヶ原合戦から寛永九年まで—」(織豊期研究会30周年記念大会準備報告会、2月報告会、2025年2月25日、の発表レジュメ)。

(14) 北村清士校注『中川史料集』(新人物往来社、1969年、138頁)によれば、中川秀成が大坂に遣わした軍勢数は、合計で720余人(中川平右衛門、古田喜太郎、萱野五右衛門など雑兵共に600余人+柴山両賀の手勢120余人)であったが(7月29日に今津留〔現・大分県大分市今津留〕を出船して、8月12日に大坂へ到着した)、前掲『中川史料集』では、「土岐伝記には人數千五百余人とあり」として、1500余人とする異説も提示している。

(15) 「(慶長5年)9月7日付島津忠恒宛島津義弘書状写」(前掲『鹿児島県史料・旧記録後編三』、574~575頁)。

(16) 前掲『角川新版日本史辞典』の「豊臣大名表」。

(17) 「(慶長5年)8月20日付本田正親宛島津義弘書状写」(前掲『鹿児島県史料・旧記録後編三』、566~567頁)。

(18) 「(慶長5年)9月7日付島津忠恒宛島津義弘書状写」(前掲『鹿児島県史料・旧記録後編三』、574~575頁)。

(19) 「(慶長5年)9月7日付島津忠恒宛島津義弘書状写」(前掲『鹿児島県史料・旧記録後編三』、574~575頁)。

(20) 「(慶長5年)8月21日付吉田清孝宛島津義弘書状写」(前掲『鹿児島県史料・旧記録後編三』、568頁)。

(21) 「(慶長5年)8月20日付本田正親宛島津義弘書状写」(前掲『鹿児島県史料・旧記録後編三』、566~567頁)も同じ。

(22) 「(慶長5年)8月21日付吉田清孝宛島津義弘書状写」(前掲『鹿児島県史料・旧記録後編三』、568頁)。

(23) 「(慶長5年)8月20日付本田正親宛島津義弘書状写」(前掲『鹿児島県史料・旧記録後編三』、566~567頁)、「(慶長5年)8月20日付島津忠恒宛島津義弘書状写」(前掲『鹿児島県史料・旧記録後編三』、568頁)も同じ。

(24) 「(慶長5年)9月7日付島津忠恒宛島津義弘書状写」(前掲『鹿児島県史料・旧記録後編三』、574~575頁)。

(25) 毛利輝元の3万、宇喜多秀家の1万には「浅野左京大夫宛高麗陣立書」(名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』7、吉川弘文館、2021年、5550号文書、169頁)の事例がある。その軍役人数に直接関係する問題ではないが、前掲「浅野左京大夫宛高麗陣立書」(前掲『豊臣秀吉文書集』7、5550号文書、169頁)では、「三万人 どうぜい 安芸宰相」(=毛利輝元)、「壱万人 どうぜい 備前中納言」(=宇喜多秀家)という記載がある。この「どうぜい」についてであるが、「浅野左京大夫宛高麗陣条々」(前掲『豊臣秀吉文書集』7、

5549号文書、168頁）では「八番、安芸宰相、備前中納言、此兩人どうぜいかハリ～～たるへき事」という文の中の「どうぜい」の横に「（同勢）」という漢字を比定している。「同勢（どうぜい）」とは、「同じ軍勢」（『日本国語大辞典（第二版）』9巻、小学館、2001年、990頁）という意味である。この意味でも意味は通じるが、むしろ、この場合の「どうぜい」は「動勢（ドウゼイ）」＝「必要に応じて助勢に向かうために部隊の後部に控えている身分のある人々〔武士たち〕」（土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』、岩波書店、1980年、187頁）の方が意味としては適切と思われる。

（26）同上。

（27）阿部猛・西村圭子編『戦国人名事典（コンパクト版）』（新人物往来社、1990年、177頁、「太田一吉（おおたかずよし）」の項）。

（28）前掲「（慶長5年）8月21日付福島正則覚書」（前掲・拙著『新解釈関ヶ原合戦の真実－脚色された天下分け目の戦い』、115頁の表4）。

（29）そもそも論として、軍役人数はなぜ端数がないのか、という問題は検討する必要があろう。豊臣政権下の軍役人数（表1）、前掲「備口人数」、前掲「福島正則覚書」では、端数がない切りのよい数値（末尾の桁が0である数値）になっている。こうした諸将の軍役人数（端数がない切りのよい数値）というのは、豊臣政権から指示された目標値（＝定員人数）であって、実際に動員された実数（端数のある数値）とは異なる数値であろう。すると、目標値（＝定員人数）と実数にどれだけの人数の乖離（人数差）があるのか、という問題があるが、この点については今後の課題としたい。なお、戦場において豊臣政権側が奉行を派遣して正確に諸将の兵力数（実数）をカウントするのは現実問題として無理なのではないか（例えば、1万人をどのようにしてカウントするのか）、と思うが、この点についても今後の課題としたい。

表 1

## 天正 17 年以降の豊臣政権下における諸将の軍役人数

## 【徳川家康方諸将】

部将名	軍役人数	備	典拠など	年次	備考
徳川家康	30000 騎	10 備 (注 1)	4、2906 号	●天正 17 年	
徳川家康	20000 人	10 備	4、2907 号	●天正 17 年	
徳川家康	30000 人		4、2912 号	●天正 17 年	
徳川家康	15000 人		5、3710 号	★天正 19 年	半役か?
徳川家康	5000 人		5、3711 号	★天正 19 年	渡海人数
徳川家康	76710 人		F (255 万 7000 石)		

結城秀康	1005 人		5、3710 号	★天正 19 年	
結城秀康	3030 人		F (10 万 1000 石、天正 18 年~)		

伊達政宗	500 人		5、3711 号	★天正 19 年	
伊達政宗	1258 人		6、4588 号	★文禄 2 年	
伊達政宗	1000 人		6、4677 号	★文禄 2 年	
伊達政宗	15450 人		M (51 万 5000 石、天正 19 年~)		
伊達政宗	17400 人		F (58 万石)		

池田輝政	2800 騎		4、2906 号	●天正 17 年	
池田輝政	2500 人		4、2907 号	●天正 17 年	
池田輝政	2500 人		4、2912 号	●天正 17 年	
池田輝政	6500 人			◆慶長 5 年	
池田輝政	4560 人		F (15 万 2000 石、天正 18 年~)		

細川忠興	2800 騎		4、2906 号	●天正 17 年	
細川忠興	2700 人		4、2907 号	●天正 17 年	
細川忠興	2700 人		4、2911 号	●天正 17 年	
細川忠興	3500 人		5、3984 号	★天正 20 年	
細川忠興	2000 人		6、4493 号	★文禄 2 年	

細川忠興	2296人		6、4588号	★文禄2年	
細川忠興	2300人		6、4677号	★文禄2年	
細川忠興	2000人			◆慶長5年	
細川忠興	3300人		M(11万石、天正15～慶長5年)		
細川忠興	5100人		F(17万石、慶長5年)		

福島正則	1900騎		4、2906号	●天正17年	
福島正則	1800人		4、2908号	●天正17年	
福島正則	1800人		4、2911号	●天正17年	
福島正則	4800人		5、3983号	★天正20年か？	
福島正則	4800人		5、3984号	★天正20年	
福島正則	4800人		5、4136号	★天正20年	
福島正則	3000人		6、4493号	★文禄2年	
福島正則	2500人		6、4588号	★文禄2年	
福島正則	2500人		6、4589号	★文禄2年	
福島正則	6500人			◆慶長5年	
福島正則	3390人		M(11万3000石、天正15～文禄4年)		
福島正則	6000人		F(20万石、文禄4年～)		

加藤清正	10000人		5、3867号	★天正20年	
加藤清正	10000人		5、3983号	★天正20年か？	
加藤清正	10000人		5、3984号	★天正20年	
加藤清正	10000人		5、4136号	★天正20年	
加藤清正	7000人		6、4493号	★文禄2年	
加藤清正・相良長毎	6790人		6、4588号	★文禄2年	
加藤清正・相良長毎	6790人		6、4589号	★文禄2年	
加藤清正	10000人		7、5550号	■慶長2年	
加藤清正	5850人		F(19万5000石、天正16年～)		
相良長毎	660人		F(2万2000石)		

関ヶ原の戦いにおける諸将の軍役人数(兵力数)についての予察的考察 (白峰)

浅野長政	3000 騎		4、2906 号	●天正 17 年	
浅野長政	2000 人		4、2908 号	●天正 17 年	
浅野長政	3000 人		4、2909 号	●天正 17 年	
浅野長政	1000 人▲		6、4677 号	★文禄 2 年	

浅野幸長	2500 人▲		6、4677 号	★文禄 2 年	
▲…同じ文書で別々に人数の記載がある。					
浅野幸長	3000 人		7、5550 号	■慶長 2 年	
浅野長政・ 浅野幸長・ 伊達政宗	4900 人		6、4493 号	★文禄 2 年	
浅野長政・ 浅野幸長	4000 人		6、4588 号	★文禄 2 年	
浅野幸長	5000 人			◆慶長 5 年	
浅野長政・ 浅野幸長	6750 人		F (22 万 5000 石、文禄 2 年～)		

黒田孝高	400 騎		4、2906 号	●天正 17 年	
黒田孝高	300 人		4、2908 号	●天正 17 年	
黒田孝高	325 人		6、4588 号	★文禄 2 年	

※黒田孝高の軍役人数は、慶長 5 年の時点では黒田長政の軍役人数に含まれていると思われる

黒田長政	5000 人		5、3867 号	★天正 20 年	
黒田長政	5000 人		5、3983 号	★天正 20 年か?	
黒田長政	5000 人		5、3984 号	★天正 20 年	
黒田長政	5000 人		5、4136 号	★天正 20 年	
黒田長政	3500 人		6、4493 号	★文禄 2 年	
黒田長政	5082 人		6、4588 号	★文禄 2 年	
黒田長政	5082 人		6、4589 号	★文禄 2 年	
黒田長政	5000 人		7、5550 号	■慶長 2 年	
黒田長政	1300 人			◆慶長 5 年	
黒田長政	5460 人		F (18 万 2000 石、天正 17 年～)		

前田利家	8000人		5、3710号	★天正19年	
前田利家	7000人		6、4493号	★文禄2年	
前田利家	7050人		M(23万5000石、天正11～慶長4年)		

前田利長	25050人		F(83万5000石、慶長3年～)	
------	--------	--	-------------------	--

※「備口人数」に名前はない

藤堂高虎	1400人		6、4493号	★文禄2年	
藤堂高虎	1473人		6、4588号	★文禄2年	
藤堂高虎	1473人		6、4589号	★文禄2年	
藤堂高虎	2800人		7、5550号	■慶長2年	
藤堂高虎	1500人			◆慶長5年	
藤堂高虎	2100人		F(7万石、文禄4年～)		

加藤嘉明	500人		6、4493号	★文禄2年	
加藤嘉明	314人		6、4588号	★文禄2年	
加藤嘉明	314人		6、4589号	★文禄2年	
加藤嘉明	2400人		7、5550号	■慶長2年	
加藤嘉明	1600人			◆慶長5年	
加藤嘉明	1800人		M(6万石、天正18年～)		
加藤嘉明	3000人		F(10万石、慶長2年～)		

#### 【石田・毛利方（豊臣公儀方）諸将】

上杉景勝	5000人		5、3710号	★天正19年	
上杉景勝	3000人		5、3711号	★天正19年	渡海人数
上杉景勝	5000人		6、4493号	★文禄2年	大谷吉継一手
上杉景勝	4500人		6、4677号	★文禄2年	
上杉景勝	16530人		M(55万1000石、天正14～慶長3年)		
上杉景勝	36000人		F(120万石、慶長3年～)		

関ヶ原の戦いにおける諸将の軍役人数(兵力数)についての予察的考察（白峰）

青木紀伊守	1000 騎		4、2906 号	●天正 17 年	
青木紀伊守	1000 人		4、2907 号	●天正 17 年	
青木紀伊守 重治（注 2）	1000 人		5、3710 号	★天正 19 年	
青木紀伊守	6000 人			▼慶長 5 年	
青木紀伊守	2400 人		M(8 万石、文禄元年まで)		
青木紀伊守	6000 人		F(20 万石、慶長 4 年～)		

丹羽長重	700 騎		4、2906 号	●天正 17 年	
丹羽長重	700 人		4、2907 号	●天正 17 年	
丹羽長重	700 人		4、2912 号	●天正 17 年	
丹羽長重	800 人		5、3710 号	★天正 19 年	
丹羽長重	1200 人		M(4 万石、天正 15～慶長 3 年)		
丹羽長重	3750 人		F(12 万 5000 石、慶長 3 年～)		

※「備口人数」に名前はない

大谷吉継	570 騎		4、2906 号	●天正 17 年	
大谷吉継	570 人		4、2907 号	●天正 17 年	
大谷・青木	2000 人		4、2909 号	●天正 17 年	
大谷吉継	1200 人		6、4493 号	★文禄 2 年	
大谷吉継	1535 人		6、4588 号	★文禄 2 年	
大谷吉継	1530 人		6、4677 号	★文禄 2 年	
大谷吉継	1200 人			▼慶長 5 年	
大谷吉継	1500 人		F(5 万石、天正 17 年～)		

中川秀政 (秀成の兄)	2500 騎		4、2906 号	●天正 17 年	
中川秀政 (秀成の兄)	2000 人		4、2908 号	●天正 17 年	

中川秀成	2000 人		6、4493 号	★文禄 2 年	
中川秀成	1520 人		6、4677 号	★文禄 2 年	

中川秀成	1500人		7、5550号	■慶長2年	
中川秀成	1500人			▼慶長5年	
中川秀成	1980人		F(6万6000石、文禄2年～)		

石田三成	1500騎		4、2906号	●天正17年	
石田三成	1500人		4、2908号	●天正17年	
石田・小野木	2600人		4、2909号	●天正17年	
石田三成	2000人		6、4493号	★文禄2年	
石田三成	1646人		6、4588号	★文禄2年	
石田三成	1640人		6、4677号	★文禄2年	
石田三成	6700人			▼慶長5年	
石田三成	5820人		F(19万4000石、文禄4年～)		

小西行長	7000人		5、3867号	★天正20年	
小西行長	7000人		5、3983号	★天正20年か？	
小西行長	7000人		5、3984号	★天正20年	
小西行長	7000人		5、4136号	★天正20年	
小西行長	4500人		6、4493号	★文禄2年	
小西行長・宗義智・松浦鎮信・大村喜前・五島純玄・有馬晴信	7415人		6、4588号	★文禄2年	
小西行長・宗義智・松浦鎮信・大村喜前・五島純玄・有馬晴信	7415人		6、4589号	★文禄2年	
小西行長	7000人		7、5550号	■慶長2年	
小西行長	2900人			▼慶長5年	
小西行長	6000人		F(20万石)		
宗義智	600人		F(2万石)		

関ヶ原の戦いにおける諸将の軍役人数(兵力数)についての予察的考察（白峰）

松浦鎮信	3000人		5、3867号	★天正20年	普請半分
松浦鎮信	3000人		5、3983号	★天正20年か？	
松浦鎮信	3000人		5、3984号	★天正20年	
松浦鎮信	3000人		5、4136号	★天正20年	
松浦鎮信	2000人		6、4493号	★文禄2年	
松浦鎮信	3000人		7、5550号	■慶長2年	
松浦鎮信	1890人		F(6万3000石)		

※軍役人数が3000人ということを考慮すると、1万石につき300人の軍役人数を基準に推計した場合、松浦鎮信の石高は10万石か？

大村喜前	1000人		5、3867号	★天正20年	普請半分
大村喜前	1000人		5、3983号	★天正20年か？	
大村喜前	1000人		5、3984号	★天正20年	
大村喜前	1000人		5、4136号	★天正20年	
大村喜前	700人		6、4493号	★文禄2年	
大村喜前	1000人		7、5550号	■慶長2年	
大村喜前	810人		F(2万7000石)		

五島純玄	700人		5、3867号	★天正20年	普請半分
五島純玄	700人		5、3983号	★天正20年か？	
五島純玄	700人		5、3984号	★天正20年	
五島純玄	700人		5、4136号	★天正20年	
五島純玄	500人		6、4493号	★文禄2年	
五島玄雅	700人		7、5550号	■慶長2年	
五島玄雅	450人		F(1万5000石、文禄2年～)		

有馬晴信	2000人		5、3867号	★天正20年	
有馬晴信	2000人		5、3983号	★天正20年か？	
有馬晴信	2000人		5、3984号	★天正20年	
有馬晴信	2000人		5、4136号	★天正20年	
有馬晴信	1300人		6、4493号	★文禄2年	

有馬晴信	2000人		7、5550号	■慶長2年	
有馬晴信	1200人		F(4万石)		

五島玄雅・ 松浦鎮信・ 有馬晴信・ 大村喜前	4000人			▼慶長5年	
---------------------------------	-------	--	--	-------	--

鍋島直茂	12000人		5、3867号	★天正20年	
鍋島直茂	12000人		5、3983号	★天正20年か？	
鍋島直茂	12000人		5、3984号	★天正20年	
鍋島直茂	12000人		5、4136号	★天正20年	
鍋島直茂	8000人		6、4493号	★文禄2年	
鍋島直茂	7642人		6、4588号	★文禄2年	
鍋島直茂	7642人		6、4589号	★文禄2年	
鍋島直茂・ 鍋島勝茂	12000人		7、5550号	■慶長2年	
龍造寺	9800人			▼慶長5年	
龍造寺高房	9270人		F(30万9000石)		
龍造寺政家	150人		F(5000石)		
鍋島直茂	1350人		F(4万5000石)		

※龍造寺高房・龍造寺政家・鍋島直茂の人数(F)を合計すると10770人になる

※鍋島勝茂(子)の石高は鍋島直茂(父)の石高の内か？

相良長毎	800人		5、3867号	★天正20年	普請半分
相良長毎	800人		5、3983号	★天正20年か？	
相良長毎	800人		5、3984号	★天正20年	
相良長毎	800人		5、4136号	★天正20年	
相良長毎	500人		6、4493号	★文禄2年	
相良長毎	800人		7、5550号	■慶長2年	
相良長毎	800人			▼慶長5年	
相良長毎	660人		F(2万2000石)		

関ヶ原の戦いにおける諸将の軍役人数(兵力数)についての予察的考察（白峰）

毛利吉成	2000 人		5、3867 号	★天正 20 年	
毛利吉成	2000 人		5、3983 号	★天正 20 年か？	
毛利吉成	2000 人		5、3984 号	★天正 20 年	
毛利吉成	2000 人		5、4136 号	★天正 20 年	
毛利吉成	1300 人		6、4493 号	★文禄 2 年	
毛利吉成	1671 人		6、4588 号	★文禄 2 年	
毛利吉成	1671 人		6、4589 号	★文禄 2 年	
毛利吉成・ 毛利吉政	2000 人		7、5550 号	■慶長 2 年	
毛利吉成	1800 人		F (6 万石)		

※「備口人数」に名前はない

※毛利吉政（子）の石高は毛利吉成（父）の石高の内か？

島津義弘	10000 人		5、3867 号	★天正 20 年	
島津義弘	10000 人		5、3983 号	★天正 20 年か？	
島津義弘	10000 人		5、3984 号	★天正 20 年	
島津義弘	10000 人		5、4136 号	★天正 20 年	
島津義弘	7000 人		6、4493 号	★文禄 2 年	
島津義弘	2128 人		6、4588 号	★文禄 2 年	
島津義弘	2128 人		6、4589 号	★文禄 2 年	
島津義弘	10000 人		7、5550 号	■慶長 2 年	
島津義弘	5000 人			▼慶長 5 年	
島津義弘	1800 人		F (6 万石)		
島津忠恒	18570 人		F (61 万 9000 石)		

※島津義弘の 10000 人は島津家全体としての軍役人数と思われる

高橋元種・ 秋月種長・ 伊東祐兵	1500 人 (注 3)		5、3867 号	★天正 20 年	
高橋元種・ 秋月種長・ 伊東祐兵	1500 人		5、3983 号	★天正 20 年か？	

高橋元種・ 秋月種長・ 伊東祐兵・ 島津豊久	2000人(注4)		5、3984号	★天正20年	
高橋元種・ 秋月種長・ 伊東祐兵・ 島津豊久	2000人		5、4136号	★天正20年	
高橋元種・ 秋月種長・ 伊東祐兵・ 島津豊久	1300人		6、4493号	★文禄2年	

高橋元種	741人		6、4588号	★文禄2年	
高橋元種	741人		6、4589号	★文禄2年	
高橋元種	600人		7、5550号	■慶長2年	
高橋元種	800人		7、5599号	■慶長2年	
高橋元種	800人			▼慶長5年	
高橋元種	1500人		F(5万石)		

秋月種長	388人		6、4588号	★文禄2年	
秋月種長	388人		6、4589号	★文禄2年	
秋月種長	300人		7、5550号	■慶長2年	
秋月種長	500人		7、5599号	■慶長2年	
秋月種長	600人			▼慶長5年	
秋月種長	900人		F(3万石)		

伊東祐兵	706人		6、4588号	★文禄2年	
伊東祐兵	706人		6、4589号	★文禄2年	
伊東祐兵	500人		7、5550号	■慶長2年	
伊東祐兵	500人			▼慶長5年	
伊東祐兵	1710人		F(5万7000石)		

島津豊久	476人		6、4588号	★文禄2年	
島津豊久	476人		6、4589号	★文禄2年	

関ヶ原の戦いにおける諸将の軍役人数(兵力数)についての予察的考察（白峰）

島津豊久	800 人		7、5550 号	■慶長 2 年	
島津豊久	840 人		F (2 万 8000 石)		

※「備口人数」に名前はない

増田長盛	500 騎		4、2906 号	●天正 17 年	
増田長盛	400 人		4、2908 号	●天正 17 年	
増田長盛	1000 人		6、4493 号	★文禄 2 年	
増田長盛	1624 人		6、4588 号	★文禄 2 年	
増田長盛	1624 人		6、4677 号	★文禄 2 年	
増田長盛	3000 人			▼慶長 5 年	
増田長盛	6000 人		F (20 万石、文禄 4 年～)		

毛利高政	600 (騎)		4、2906 号	●天正 17 年	
毛利高政	500 人		4、2908 号	●天正 17 年	
毛利高政	600 人		F (2 万石、文禄 2 年～)		

※「備口人数」に名前はない

戸田勝成	300 騎		4、2906 号	●天正 17 年	
戸田勝成	290 人		4、2908 号	●天正 17 年	
戸田勝成	350 人		5、4225 号	★天正 20 年	
戸田勝成	500 人			▼慶長 5 年	
戸田勝成	300 人		F (1 万石、天正 13 年～)		

福原長堯	500 人		5、4225 号	★天正 20 年	
福原長堯	500 人		7、5599 号	■慶長 2 年	御目付
福原長堯	500 人			▼慶長 5 年	
福原長堯	360 人		F (1 万 2000 石、慶長 2 ～同 4 年)		

小早川隆景	10000 人		5、3867 号	★天正 20 年	
小早川隆景	10000 人		5、3983 号	★天正 20 年か？	

小早川隆景	10000人		5、3984号	★天正20年	
小早川隆景	10000人		5、4136号	★天正20年	
小早川隆景	7000人		6、4493号	★文禄2年	
小早川隆景	6596人		6、4588号	★文禄2年	
小早川隆景	6600人		6、4589号	★文禄2年	
小早川隆景	9210人		M (30万7000石、天正15～文禄4年)		

※小早川隆景は慶長2年死去

小早川秀秋	10000人		7、5550号	■慶長2年	
小早川秀秋	8000人			▼慶長5年	
小早川秀秋	10710人		F (35万7000石、文禄4年～)		

小早川秀包	1500人		5、3867号	★天正20年	
小早川秀包	1500人		5、3983号	★天正20年か？	
小早川秀包	1500人		5、3984号	★天正20年	
小早川秀包	1500人		5、4136号	★天正20年	
小早川秀包	1000人		6、4493号	★文禄2年	
小早川秀包	400人		6、4588号	★文禄2年	
小早川秀包	400人		6、4589号	★文禄2年	
小早川秀包	1000人		7、5550号	■慶長2年	
小早川秀包	1000人			▼慶長5年	
小早川秀包	3900人		F (13万石)		

立花宗茂	2500人		5、3867号	★天正20年	
立花宗茂	2500人		5、3983号	★天正20年か？	
立花宗茂	2500人		5、3984号	★天正20年	
立花宗茂	2500人		5、4136号	★天正20年	
立花宗茂	1700人		6、4493号	★文禄2年	
立花宗茂	1133人		6、4588号	★文禄2年	
立花宗茂	1133人		6、4589号	★文禄2年	

関ヶ原の戦いにおける諸将の軍役人数(兵力数)についての予察的考察（白峰）

立花宗茂	5000人		7、5550号	■慶長2年	
立花宗茂	3900人			▼慶長5年	
立花宗茂	3960人		F(13万2000石、天正15年～)		

高橋直次	800人		5、3867号	★天正20年	普請半分
高橋直次	800人		5、3984号	★天正20年	
高橋直次	800人		5、4136号	★天正20年	
高橋直次	500人		6、4493号	★文禄2年	
高橋直次	288人		6、4588号	★文禄2年	
高橋直次	290人		6、4589号	★文禄2年	
高橋直次	500人		7、5550号	■慶長2年	
高橋直次	540人		F(1万8000石、文禄4年～)		

※「備口人数」に名前はない

筑紫広門	900人		5、3867号	★天正20年	普請半分
筑紫広門	900人		5、3983号	★天正20年か？	
筑紫広門	900人		5、3984号	★天正20年	
筑紫広門	900人		5、4136号	★天正20年	
筑紫広門	600人		6、4493号	★文禄2年	
筑紫広門	327人		6、4588号	★文禄2年	
筑紫広門	330人		6、4589号	★文禄2年	
筑紫広門	500人		7、5550号	■慶長2年	
筑紫広門	500人			▼慶長5年	
筑紫広門	540人		F(1万8000石)		

長宗我部元親	3000人		5、3983号	★天正20年か？	
長宗我部元親	3000人		5、3984号	★天正20年	
長宗我部元親	3000人		5、4136号	★天正20年	
長宗我部元親	2000人		6、4493号	★文禄2年	
長宗我部元親	2590人		6、4588号	★文禄2年	

長宗我部元親	2590人		6、4589号	★文禄2年	
長宗我部元親	3000人		7、5550号	■慶長2年	
長宗我部元親	2940人		M(9万8000石、天正13～慶長4年)		

※長宗我部元親は慶長4年死去

長宗我部盛親	2100人			▼慶長5年	
長宗我部盛親	6660人		F(22万2000石、慶長4年～)		

※長宗我部盛親の石高(22万2000石)については要検討。慶長5年でも9万8000石のままか？

毛利輝元	30000人		5、3867号	★天正20年	
毛利輝元	30000人		5、3983号	★天正20年か？	
毛利輝元	30000人		5、3984号	★天正20年	
毛利輝元	30000人		5、4136号	★天正20年	
毛利輝元	25000人		6、4493号	★文禄2年	
毛利輝元	13600人▲		6、4588号	★文禄2年	
毛利輝元	3000人▲		6、4588号	★文禄2年	
▲…同じ文書で2カ所に記載が分かれている。					
毛利輝元	17060人		6、4589号	★文禄2年	
毛利輝元	30000人		7、5550号	■慶長2年	
毛利輝元	41500人			▼慶長5年	
毛利輝元	36150人		F(120万5000石)		

宇喜多秀家	10000人		5、3984号	★天正20年	
宇喜多秀家	10000人		6、4493号	★文禄2年	
宇喜多秀家	7785人		6、4588号	★文禄2年	
宇喜多秀家	8000人		6、4677号	★文禄2年	
宇喜多秀家	10000人		7、5550号	■慶長2年	
宇喜多秀家	18000人			▼慶長5年	
宇喜多秀家	17220人		F(57万4000石)		

関ヶ原の戦いにおける諸将の軍役人数(兵力数)についての予察的考察 (白峰)

長束正家	500 人		5、4225 号	★天正 20 年	
長束正家	1000 人			▼慶長 5 年	
長束正家	1500 人		F (5 万石、文禄 4 年~)		

脇坂安治	1000 人		6、4493 号	★文禄 2 年	
脇坂安治	900 人		6、4588 号	★文禄 2 年	
脇坂安治	900 人		6、4589 号	★文禄 2 年	
脇坂安治	1200 人		7、5550 号	■慶長 2 年	
脇坂安治	1200 人			▼慶長 5 年	
脇坂安治	990 人		F (3 万 3000 石)		

早川長政	170 人		6、4493 号	★文禄 2 年	
早川長政	347 人		6、4588 号	★文禄 2 年	
早川長政	340 人		6、4677 号	★文禄 2 年	
早川長政	600 人		F (2 万石、慶長 4 年~)		

※「備口人数」に名前はない

太田一吉	300 騎		4、2906 号	●天正 17 年	
太田一吉	200 人		4、2907 号	●天正 17 年	
太田一吉	80 人		6、4493 号	★文禄 2 年	
太田一吉	110 人		6、4677 号	★文禄 2 年	
太田一吉	390 人		7、5550 号	■慶長 2 年	御目付
太田一吉・ 太田一成	1020 人			▼慶長 5 年	
太田一吉	1950 人		F (6 万 5000 石、慶長 2 年~)		

織田秀信	6000 人		6、4493 号	★文禄 2 年	
織田秀信	4018 人		6、4588 号	★文禄 2 年	
織田秀信	4000 人		6、4677 号	★文禄 2 年	
織田秀信	5300 人			▼慶長 5 年	
織田秀信	3990 人		F (13 万 3000 石、文禄元年~)		

蜂須賀家政	2800 騎		4、2906 号	●天正 17 年	
蜂須賀家政	2500 人		4、2908 号	●天正 17 年	
蜂須賀家政	2500 人		4、2911 号	●天正 17 年	
蜂須賀家政	7200 人		5、3983 号	★天正 20 年か？	
蜂須賀家政	7200 人		5、3984 号	★天正 20 年	
蜂須賀家政	7200 人		5、4136 号	★天正 20 年	
蜂須賀家政	5000 人		6、4493 号	★文禄 2 年	
蜂須賀家政	4500 人		6、4588 号	★文禄 2 年	
蜂須賀家政	4500 人		6、4589 号	★文禄 2 年	
蜂須賀家政	7200 人		7、5550 号	■慶長 2 年	
蜂須賀家政	2000 人 →主が煩いのため、家老の者共が召し連れる			▼慶長 5 年	
蜂須賀家政	5310 人		F (17 万 7000 石、天正 13 年～)		

生駒親正	2500 騎		4、2906 号	●天正 17 年	
生駒親正	2200 人		4、2908 号	●天正 17 年	
生駒親正	2200 人		4、2911 号	●天正 17 年	
生駒親正	5700 人		5、3983 号	★天正 20 年か？	
生駒親正	5500 人		5、3984 号	★天正 20 年	
生駒親正	5500 人		5、4136 号	★天正 20 年	
生駒親正	4000 人		6、4493 号	★文禄 2 年	
生駒親正	2450 人		6、4588 号	★文禄 2 年	
生駒親正	2450 人		6、4589 号	★文禄 2 年	
生駒親正	1000 人 →主が煩いのため、家老の者共が召し連れる			▼慶長 5 年	
生駒親正	4500 人		F (15 万石、天正 15 年～)		
生駒親正	2670 人		F (8 万 9000 石、慶長 2 年～)		

生駒一正	2700 人		7、5550 号	■慶長 2 年	
生駒一正	2700 人		7、5599 号	■慶長 2 年	
生駒一正	1830 人		F (6 万 1000 石、慶長 2 年～)		

※関ヶ原の戦いでは、生駒親正（父）は石田・毛利方（豊臣公儀方）、生駒一正（子）は徳川家康方についた。よって、軍役人数をどのように分けたのか、検討する必要がある。

※生駒一正の6万1000石は生駒親正（15万石）領内。よって、生駒一正の6万1000石を差し引くと、生駒親正は8万9000石になるが、慶長5年の時点における生駒親正と生駒一正の軍役人数については要検討。

【凡例】 ●…小田原の陣

★…文禄の役

■…慶長の役

◆…「（慶長5年）8月21日付福島正則覚書」（拙著『新解釈関ヶ原合戦の真実－脚色された天下分け目の戦い』、宮澤出版社、2014年、115頁の表4）。

▼…「備口人数」（図録『石田三成と西軍の関ヶ原合戦』、長浜市長浜城歴史博物館編集・発行、2016年、16～17頁の「備口人数」〔真田宝物館蔵〕1通の写真、118～119頁の活字翻刻）。

M…1万石につき300人の軍役人数を基準に推計した人数（兵力数）。（ ）内は慶長5年以外の時点での石高（石高の典拠は『角川新版日本史辞典』、角川書店、1996年、1265～1272頁の「豊臣大名表」）。

F…1万石につき300人の軍役人数を基準に推計した人数（兵力数）。（ ）内は慶長5年の時点での石高（典拠は前掲『角川新版日本史辞典』の「豊臣大名表」）。

4…名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』4（吉川弘文館、2018年）。

5…名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』5（吉川弘文館、2019年）。

6…名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』6（吉川弘文館、2020年）。

7…名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』7（吉川弘文館、2021年）。

(注1)「備」の読み方については、織田信雄は1万5000騎で「六そなへ」と記されているので（前掲『豊臣秀吉文書集』4、2906号文書）、「備」の読み方は「そなへ」であることがわかる。

(注2)青木紀伊守の実名が「重治」であるとわかった点は重要である。黒田基樹『羽柴を名乗った人々』（株式会社KADOKAWA、2016年、108頁）では「当時の文書史料で確認されるのは「重吉」のみである」と指摘されているが、前掲『豊臣秀吉文書集』5（3710号文書、「肥前名護屋在陣衆書上写」）は一次史料であるので、「青木紀伊守」の実名については「重治」も検討すべきであろう。

(注3)後掲(注4)の2000人から(注3)の1500人を差し引くと、島津豊久の軍役人数は500人ということになる。

(注4)同上。

表2

## 関ヶ原本戦における軍役人数

部将名	「備口人数」の軍役人数	本稿で検討した結果の軍役人数
石田三成	6700	豊臣政権下のこれまでの軍役人数からすると 1500～2000 か？
島津義弘	5000	8月20日付島津義弘書状の内容からすると 1000 以内か？
宇喜多秀家	1万8000	豊臣政権下のこれまでの軍役人数からすると 1万 か？ 実際はもっと少なかった可能性もある
小西行長	2900	豊臣政権下のこれまでの軍役人数からすると 2900 はかなり少ない数値
大谷吉継	1200	1200 か？
島津豊久	記載なし	豊臣政権下のこれまでの軍役人数からすると 476～800 か？
合計	3万3800	1万7900 以下

小早川秀秋	8000	豊臣政権下のこれまでの軍役人数からすると 1万 か？
-------	------	----------------------------

【付記】

吉村豊雄「幕藩制成立期における大名の権力編成と知行制（一）－細川氏を中心に－」（補注1）では、天正17年9月27日付の豊臣秀吉領知宛行状（補注2）の記載内容をもとに、①細川氏は「丹後一国領知高」11万700石を「父子一職」に宛て行われた、②細川忠興は軍役人数3000人、軍役高6万石、無役高2万4700石である、③細川幽斎は軍役人数1000人、軍役高2万石、無役高6000石である、と指摘されている。

この場合、細川忠興、細川幽斎の軍役人数と軍役高の関係を見ると、1万石につき500人の軍役人数を基準にしていることがわかる。

上記②によれば、細川忠興の軍役人数は3000人であるが、本稿（「関ヶ原の戦いにおける諸将の軍役人数(兵力数)についての予察的考察」）の表1における細川忠興の実際の軍役人数の事例を見ると、3000人ちょうどという事例は1例もなく、各事例は2000～3500人というように3000人前後の軍役人数ということになる。

このように、豊臣秀吉が細川忠興に指定した軍役人数（3000人）と、実際に動員された軍役人数の各事例（2000～3500人）に人数の乖離がある点は注目されるが、その理由の検討については今後の課題としている。

（補注1）『文学部論叢』41号（熊本大学文学部、1993年）。

（補注2）永青文庫蔵「細川家文書」。この「天正17年9月27日付細川忠興・細川藤孝宛豊臣秀吉領知宛行状」は、名古屋市博物館編『豊臣秀吉文書集』4（吉川弘文館、2018年、2713号文書、18頁）に収載されている。